

大豆管理情報（第3号）

令和7年8月1日
農業技術課 広域普及指導センター

1 気象経過（図1）

（1）気温

5月下旬の平均気温は、17.8℃（対平年差－1.2℃）と平年に比べ低かった。
6月の平均気温は、23.4℃（同＋2.0℃）と平年に比べかなり高かった。
7月の平均気温は、29.2℃（同＋3.7℃）と平年に比べかなり高かった。

（2）降水量

5月下旬の降水量は、40.5mm（対平年比112%）と平年並であった。
6月の降水量は、129.0mm（同75%）と平年並であった。
7月の降水量は、31.5mm（同13%）と平年に比べかなり少なかった。
梅雨明けは7月18日（前年7月31日、平年7月23日）と平年に比べ5日早かった。

（3）全天日射量

5月下旬の平均全天日射量は、16.8MJ/m²/日（対平年比88%）と平年に比べ少なかった。
6月の平均全天日射量は、18.2MJ/m²/日（同105%）と平年並であった。
7月の平均全天日射量は、23.2MJ/m²/日（同140%）と平年に比べかなり多かった。

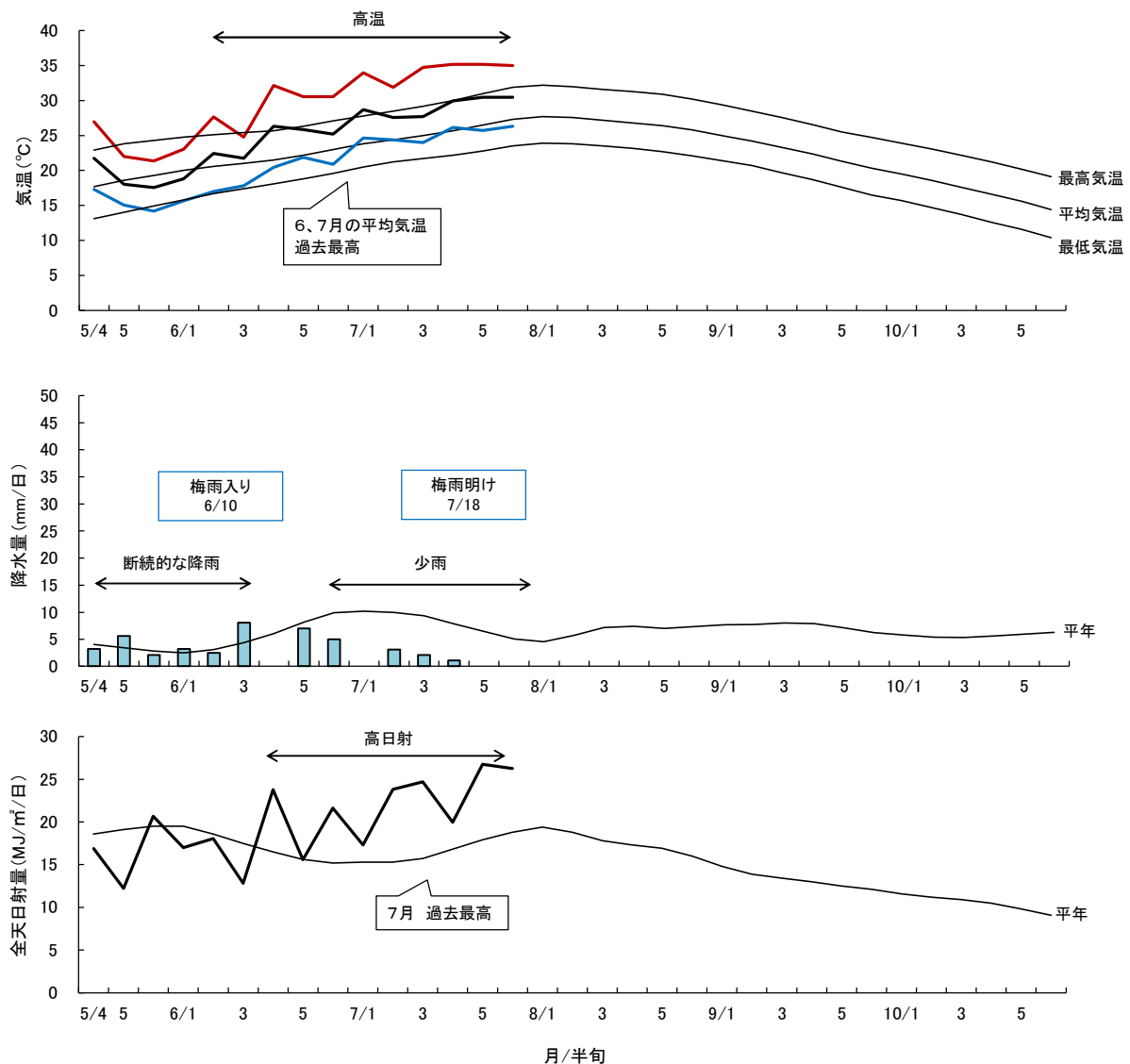


図1 令和7年の気象経過（富山地方気象台）

2 生育経過（生育観測ほデータ）

（１）エンレイ（単作）

- ・近年に比べ、主茎長は並、本葉葉数は0.1葉多く、一次分枝数は0.4本少なくなっている。
- ・開花期は、平年に比べ2日早い7月17日となった。

（２）エンレイ（麦あと）

- ・近年に比べ、主茎長はやや短く、本葉葉数は0.1葉少なく、一次分枝数は0.5本多くなっている。
- ・開花期は、平年に比べ3日遅い7月23日となった。

（３）シュウレイ

- ・平年に比べ、主茎長は短く、本葉葉数は0.5葉少なく、一次分枝数は0.4本少なくなっている。

表1 大豆生育観測ほ調査結果（8月1日調査）

品種	年次	播種日 (月日)	栽植本数 (本/m ²)	主茎長 (cm)	本葉葉数 (葉)	一次分枝数 (本)	開花期 (月日)
エンレイ	単作	R7	16.7	73.9	12.6	1.5	7月17日
		R6	17.7	69.4	12.3	1.8	7月18日
		近年	16.6	74.4	12.5	1.9	7月19日
		近年比・差	-1	100	0.1	-0.4	-2
	麦あと	R7	16.1	63.8	12.1	2.5	7月23日
		R6	16.4	63.2	12.0	2.5	7月19日
		近年	16.8	70.7	12.2	2.0	7月20日
		近年比・差	2	96	-0.1	0.5	3
シュウレイ		R7	11.7	52.2	10.9	2.2	-
		R6	11.7	61.1	11.8	3.0	7月19日
		平年	14.9	61.8	11.4	2.6	7月23日
		平年比・差	3	79	-0.5	-0.4	-

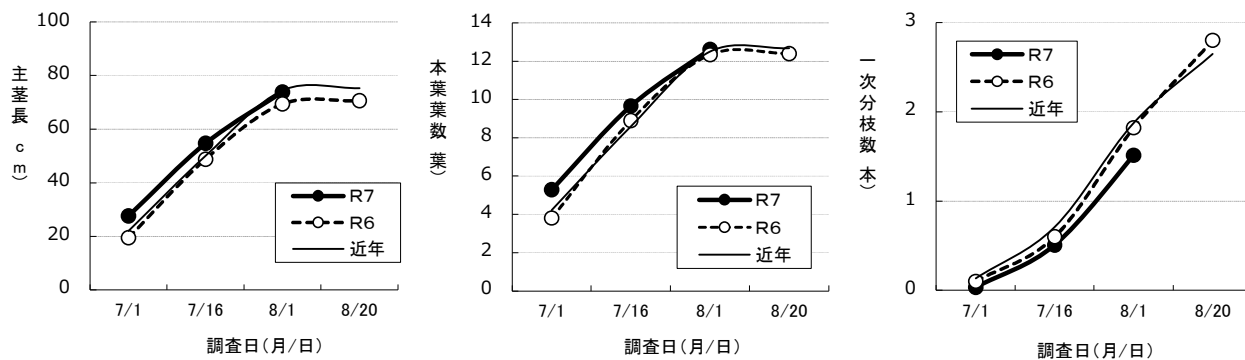


図2 単作エンレイの生育の推移

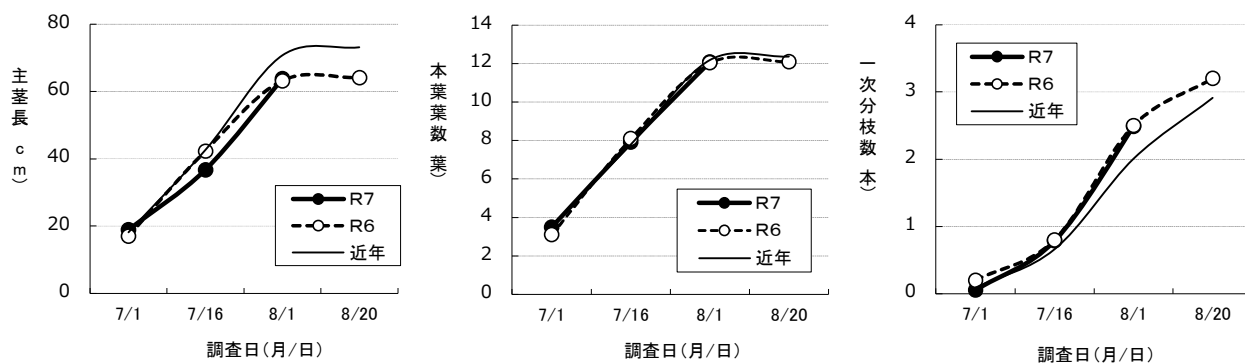


図3 麦あとエンレイの生育の推移

3 当面の技術対策

- ・高温・少雨がが続いていることから、降雨に頼らず積極的に畦間かん水を実施する。
- ・紫斑病及びカメムシ類の2回の基本防除を徹底する。ハダニ類の多発が懸念されるため、発生状況に応じて随時防除を実施する。

(1) 排水対策

- ・畦間かん水の入排水や降雨後の排水を速やかに行うため、溝の手直しや連結、排水溝の掘り下げを確実に実施する。

(2) 畦間かん水

- ・高温・少雨がが続いていることから、落花・落莢の防止による莢数の確保と青立ちの防止を図るため、9月上旬まで晴天が3日以上続くと見込まれる場合は、降雨に頼らず積極的に畦間かん水を行う。
- ・かん水は短時間で実施し、ほ場全体に水が行き渡ったら、水口をしっかり止め速やかに排水する。
- ・用水が下流域まで行き渡るように、地域での計画的かつ効率的な水利用に努める。



写真1 入排水を速やかに行うため溝を確実に連結

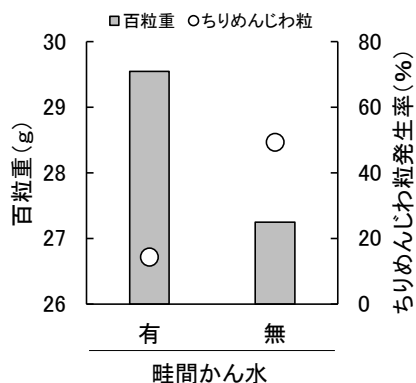


図4 かん水の有無が百粒重やしわ粒の発生に及ぼす影響（H24 富山農振セ）

注）かん水有区：かん水2回実施



写真2 子実肥大期の水不足や高温で発生しやすい被害粒



写真3 開花期以降の水不足により落花・落莢した大豆（R5現地ほ場）

(3) 病虫害防除 (図5)

【基本防除】

- ・カメムシ類の発生が多くなっているため、カメムシ類と紫斑病に対して、2回の基本防除（8月2～3半旬頃と4～5半旬頃）を徹底する。
- ・薬剤は、同一系統の薬剤の連用は避け、莢や茎葉に薬剤が十分付着するよう散布する。

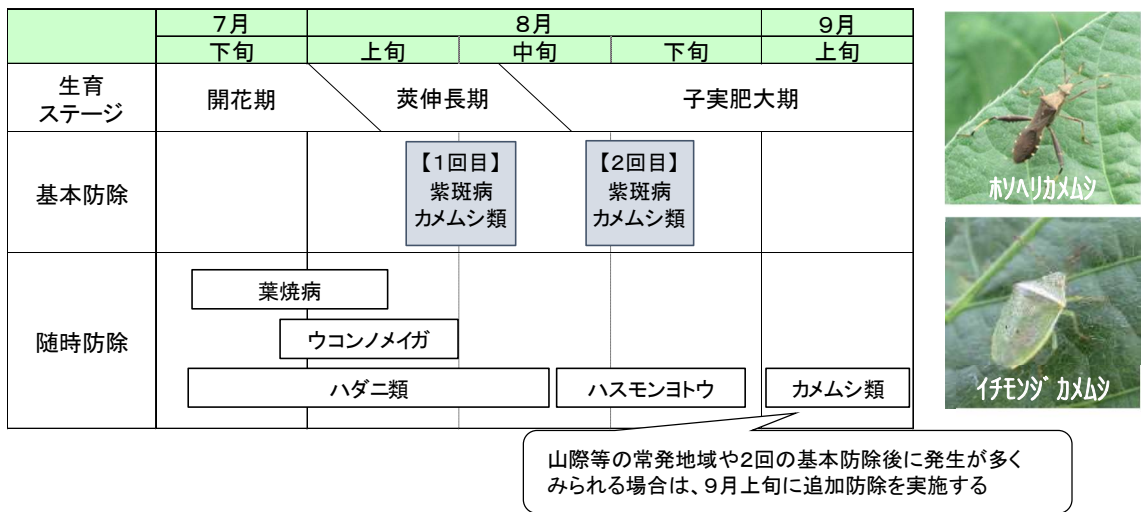


図5 大豆の病虫害防除時期（例：6月上旬播種）

【随時防除】

ア ハダニ類

- ・生育観測ほにおけるハダニ類の発生株率は5.8%と平年(1.8%)に比べかなり高くなっている（7月25日調査、農研）。今後、高温・少雨が続いた場合、被害の拡大が懸念される。
- ・多発すると子実が小粒化し減収の要因となる。
- ・8月上～中旬にハダニによる葉の黄化がほ場の1割程度みられたら、速やかに防除を行う。なお、防除の際は、葉の裏に薬剤が十分かかるように散布する。

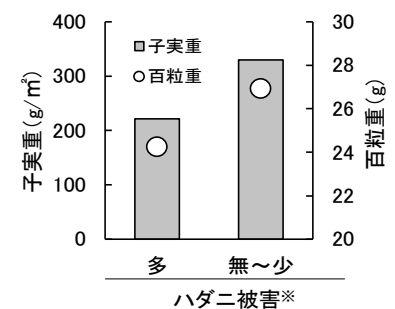


図6 ハダニの被害程度が子実重と百粒重に及ぼす影響 (R5 現地ほ場)

※9月上旬の被害、多：ハダニによる葉の黄化が株の80%以上、無～少：10%以下

イ ウコンノメイガ

- ・生育の旺盛なほ場や葉色が濃いほ場で多発する傾向がある。
- ・幼虫による葉巻の発生量を確認し、1株当たり平均6個以上の葉巻があれば、速やかに「ダントツH粉剤DL」や「プレバソンフロアブル5」等で防除する。

ウ ハスモンヨトウ

- ・若齢幼虫による白変葉が見え始めたら、被害葉を速やかに取り除き、ほ場外で処分するとともに、発生状況に応じて防除を実施する。

エ 葉焼病

- ・強風雨で蔓延し、多発すると収量、品質が低下する。
- ・発生初期に「Zボルドー」等で防除する。



写真4 葉焼病

(4) 雑草対策

- ・ほ場内の大型雑草や難防除雑草は、雑草が結実する前に防除（手取り、除草剤塗布、地際からの刈取り等）を徹底する。特に、帰化アサガオ類やイヌホオズキ類は水田周辺等も含め防除するとともに、防除後も再度発生することがあるため、継続的に防除する。